

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	漱石の女性像に関する一考察：中期の作品を中心に
Author(s)	劉, 国堯
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 17期: 110 - 122
Issue Date	2003-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038881
Right	
Relation	



漱石の女性像に関する一考察

- 中期の作品を中心に -

A Study on the Female Image in Soseki's Masterpieces
- Concentrating in the Middle Period -

劉 国堯

序言. 問題の所在

「漱石が愛した対象は自然・人事にわたり様々なものがあるが、作品に関連深いのは何と言っても彼が愛した女性達であろう。」このように小坂が指摘したとおり、夏目漱石の作品の中には、必ず女性が登場し、またその女性が小説の中で果たす役割も決して小さくない。漱石が描く女性像は、皆それぞれ小説の中で違う役割を与えられてはいるが、その外見および内面の描写には共通するところがある。

本論文の目的は、夏目漱石の作品に登場する女性像について分析を行うことである。特に『心』に登場する静、『三四郎』の美禰子および『それから』の三千代に焦点をあて、この三作品における分析を通して、漱石の普遍的な女性像に関する考察を行う。また最後に漱石の女性観などについて言及する。

実のところ、漱石の女性像を分析するにあたり、三作品を選んだのには積極的な理由がある。『心』に登場する静は漱石の全作品を通して結婚前と後の女性の描写がある唯一の作品である。そこでまず、この静と他の作品に登場する女性（美禰子：結婚前の女性像、三千代：結婚後の女性像）との比較を通して、共通点を浮き彫りにすることができ、この共通点こそが、漱石の中に存在する普遍的な女性像を示すと考える。次に女性像の比較を通して、相違点を明らかにし、それをもとに具体的な漱石の普遍的な女性像を明らかにする。最後に、漱石に関する文献より、漱石の中に存在する普遍的な女性像がどのように形作られたのか、またモデルとなった人は誰なのか、という点に関して考察を加える。これらの考察によって、漱石自身の女性観の検討を行う。

第一章 結婚前の女性像 - 『心』と『三四郎』

「『私の今度の小説箱表紙見返扉一切合切自分の考案で自分の手を下してやりました其内の表紙にあれ（「石鼓文」の拓本）を応用しました（大正三・八・九 橋口貢宛）」と夏

目漱石自ら語るように、「心」は漱石にとっても記念すべき、愛すべき作品であったのである²。」

「漱石は明治三十八年の処女作『吾輩は猫である』以来恰度十年間書き続けてきた、彼自身の恋愛体験をモチーフとした創作態度を、『こころ』において終止符を打とうとしているのだということである。あるいは終止符とまではいえないまでも、相当の変化を予期した一つの結節点をつくらうとしている。」

『心』は夏目漱石の中編小説である。1914年「朝日新聞」に『こころ』のタイトルで連載された。同年『心』に改めて刊。親友を裏切ったため苦しみ自殺する主人公「先生」の孤独な内面を、前半は「私」という学生の眼をとおして間接的に、そして後半は「先生」の遺書という書簡体という形をとって描いている。

『心』は漱石にとって特別な作品であると同時に、この作品に登場する女性もまた、漱石作品の中で特別な位置をしめる女性であるといつてよい。その女性こそ漱石の全作品を通して結婚前と後の女性の描写がある唯一の女性、静である。『心』では静についての描写は決して多いとは言えないが、静が存在するからこそ、「先生」の裏切り、kの自殺などの出来事が引き起こされた。『心』は主に二部分に分けられている（「上 先生と私」と「下 先生と遺書」）。従って、静についての描写もこのように二部分 結婚前と結婚後 から成り立っている。本章では特に結婚前の静を取り上げて分析する。

結婚する前の女性といえば、『三四郎』の美禰子は漱石作品中で比較的目的を引く未婚女性の一人である。『三四郎』は、『坑夫』や『夢十夜』によって、文学的な転回の試作をとげた漱石が、その転回後に書いた、いわば本格的近代小説の第一作である。この第一作に出てくるヒロインも漱石文学に存在する女性像の中では独特の魅力を発揮しているといえよう。『三四郎』は夏目漱石の中編小説である。1908年「朝日新聞」に連載され、『それから』『門』と共に三部作をなす。熊本の高校から東京の大学に来た青年三四郎を通じて明治末期の大学生生活を、卓抜な文明批評を散りばめて描く漱石初期の徘徊趣味から後期への過渡的作品として注目される。

同じ漱石中期作品のヒロインとしての二人は一体どんな相違点を持っているのであろうか。漱石の御嬢さんとしての静についての描写が非常に限られている。彼女の形象性は極めて稀薄である。静の描写と対照的に、『三四郎』では美禰子についての描写は比較的工夫しているといえよう。

しかし、同じ明治時代の女性として、静と美禰子はやはり驚くべきほど似ている。以下その共通点について言及を行う。

¹ 小坂晋『夏目漱石 - 伝記と分析の間を求めて - 』（桜楓社、1986年）

² 坂本浩『夏目漱石 - 作品の深層世界 - 』（明治書院、1979年）

1. 共通点：

教育程度

女性知識人の少ない当時にしても、静と美禰子は両者とも知識のある人である。

この時代における平均的な女性の教育水準と比較すると、『三四郎』の美禰子はかなり高度な教育を受けてきたと言えよう。事実、『三四郎』ではこんなシーンがある。広田先生が英国の閨秀作家のアフラ、ベーンを紹介する時、美禰子に向かって「面白いな。里見さん、どうです、一つオルノーコでもかいちゃあ」と言った。知識人としての広田にそう言われる美禰子はかなりの文学基礎を持っていると想像できる。また、この上に英語が堪能である。このことから当時の平均的な女性と比べ、高い教育水準を有していることがわかる。

生まれ育ちの背景

両者とも裕福な家で育てられた。二人が相当の知識を持っていることは裕福な家で育てられてきた証拠の一つである。また、静は軍人の家庭だったが、「厩などがあって、邸が広過ぎる」くらいの家であった。美禰子の場合は両親とお兄さんに早く死なれても、経済的に窮する家庭ではないことがうかがえる。

容姿端麗

私はそれ迄未亡人の風采や態度から推して、此御嬢さんの凡てを想像してみたのです。然し其想像は御嬢さんに取つてあまり有利なものではありませんでした。軍人の妻君だからあ々なのだらう、其妻君の娘だから斯うだらうと云つた順序で、私の推測は段々延びて行きました。所が其推測が、御嬢さんの顔を見た瞬間に悉く打ち消されました。さうして私の頭の中へ今迄想像も及ばなかつた異性の匂が新らしく入つて来ました。（『心』「下先生と遺書十一」）

御嬢さんの直接の描写ではないが、この描写より『心』の御嬢さんとしての静は如何に可愛い女の子かがわかる。実は御嬢さんの静の外貌描写は全文に一所しか出てこない。

御嬢さんは大層着飾つておました。地体が色の白い癖に、白粉を豊富に塗つたものだから猶目立ちました。往来の人がじろじろ見て行くのです。（『心』「下先生と遺書十七」）

この一箇所の描写でも静は肌の白い女性であるのがわかる。当時では、肌が白いのは

¹ 宮井一郎『漱石文学の全貌』下巻（国書刊行会、1984年）

美人であると考えられていた。さらに、学生である「私」は初めて奥さんになった静に会った時、「美しい奥さんであった」と静のことを思っている。以上のことより、御嬢さんの静は美人であると言えよう。

静にひきかえて、美禰子の外貌はいたるところで描写されている。

二重瞼の切長の落付いた恰好である。目立つて黒い眉毛の下に生きてある。同時に綺麗な歯があらはれた。此歯と此顔色とは三四郎に取つて忘るべからざる対照であつた。

今日は白いものを薄く塗つてある。けれども本来の地を隠す程に無趣味ではなかつた。濃やかな肉が、程よく色づいて、強い日光に負けない様に見える上を、極めて薄く粉が吹いている。てらてら照る顔ではない。

肉は頬と云はず顎と云はずきちりと締まつている。骨の上に余つたものは沢山ない位である。それでみて、顔全体が柔らかい。肉が柔らかいのではない、骨そのものが柔らかい様に思はれる。奥行の長い感じを起こさせる顔である。（『三四郎』三の十四）

美禰子は三四郎に一目惚れをさせる美人である。さらに、この美人の顔は「歌麿式」である。

二人とも男に囲まれている

『心』の静は「先生」と「k」に好かれている。それと同じように、『三四郎』の美禰子は女友達よりよく男友達と遊んでいる。例えば：三四郎、野々宮、広田先生、与次郎などである。もちろん、男女交際が今のように自由ではなかつた明治時代の当時は二人にはそれなりの理由がある。

静は家が下宿である関係から、下宿のお客の「先生」と「k」との接触が多いのは当然のことだと考えられる。美禰子の場合も両親に死なれて、お兄さんと一緒に生活することになった。お兄さんの関係で男性と接する機会が増えてきたのである。また、二人とも、明るく、社交的であることも無視出来ない。この積極的な人間描写は漱石文学に登場する男性像ときわめて異なっていることがわかる。例示すると、『心』の先生やk、『三四郎』の主人公三四郎も社交性に欠けているといつてよい。漱石文学に登場する男性像は臆病であり、度胸がなく、社交が苦手であるからこそ、女性像はさらに際立ってその社交的性格を描写されている。

二人とも日本的な女性の面も持っている

「お嬢さんとしての彼女は、花を活け琴をひき、内気で控え目な日本的女性として描かれている。「若い女として御嬢さんは思慮に富んだ方」（下・三十四）という指摘もあって、若き日の先生に「信仰に近い愛」（下・十四）を抱かせるにふさわしい人柄として

描き出されている。」¹と相原が指摘するように、『心』の御嬢さん静はかなり日本的な女性の一面を持っている。

一方、「都会人である聡明」であり「近代人特有の微妙な女性心理がある」美禰子も同じく日本的な女性の面も持っている。

広田先生は例によつて烟草を呑み出した。与次郎は之を評して鼻から哲学の烟を吐くと云つた。成程烟の出方が少し違ふ。悠然として太く遅ましい棒が二本穴を抜けて来る。与次郎は其烟柱を眺めて、半分背を唐紙に持たした儘黙つてゐる。三四郎の眼はぼんやり庭の上にある。引越ではない。丸で小集の体に見える。談話も従つて気楽なものである。ただ美禰子丈が広田先生の陰で、先生がさつき脱ぎ棄てた洋服を畳み始めた。先生に和服を着せたのも美禰子の所為と見える。（『三四郎』四の十六）

皆で雑談などを興じて盛り上がっているとき、その傍らで真面目に家事や服の整理をやるのが典型的・伝統的な日本的な女性の姿だと考える。近代女性のイメージの中に美禰子の日本的な女性の一面を垣間見ることができる。

独立性

『心』の静は御嬢さんの時は母もとで生活して、いつも母には従順である。ところが、静のすべてがそうだというわけではない。

時たま御嬢さん一人で、用があつて私の室へ這入つた序でに、其所に坐つて話し込むやうな場合も其内に出て来ました。（中略）あまり長くなるので、茶の間から母に呼ばれても、「はい」と返事をする丈で、容易に腰を上げない事さへありました。それでめて御嬢さんは決して子供ではなかつたのです。（『心』「下 先生遺書十三」）

この引用から、静はかなりの独立心が強く、そのためにこっそり母と抗っていると私には見える。

あの女は自分の行きたい所でなくつちや行きつこない。勧めたつて駄目だ。好きな人がある迄独身で置くがよい。（『三四郎』七の五）

と指摘された通り、美禰子は多くのことでは自分の意志で決める。もちろん、それは彼女の生まれ育ちの背景や受けた教育と関係深い。これも、彼女の「西洋流」の一面では

¹ 相原和邦『漱石文学』（塙書房、1980年）

² 坂本浩『夏目漱石 - 作品の深層世界 -』（明治書院、1979年）

ないかと考えることができる。

2. 相違点：

次に相違点について考察する。

性格

形象の情報量が極めて少ないため、『心』の静は御嬢さんの時代はあまり注目される性格がない。当時の彼女の性格を追求すれば、やはり前述で引用した相原氏の「内気で控え目な日本的女性」と言うことができる。

逆に、美禰子の形象は非常に鮮明に描かれており彼女の性格は比較的容易に把握できる。その性格を分析すると、静と違う所がいくつかあげられる。

「あの女は落ち付いて居て、乱暴だ」と広田が云つた。

「え、乱暴です。イブセンの女のような所がある」

「イブセンの女は露骨だが、あの女は心が乱暴だ。尤も乱暴と云つても、普通の乱暴とは意味が違ふが、野々宮の妹の方が、一寸見ると乱暴の様で、矢張り女らしい。妙なものだね」（『三四郎』六の四）

与次郎と広田先生の対話から、美禰子は「乱暴」だということを読み取るが、この後の「乱暴」についての説明があるが、それは与次郎の説明である。

「だつて、先刻里見さんを評して、落ち付いてみて乱暴だと云つたぢやないか。それを解釈して見ると、周囲に調和して行けるから、落ち付いてあられるので、何所かに不足があるから、底の方が乱暴だと云ふ意味ぢやないのか」（『三四郎』六の五）

美禰子の「乱暴」は社会や自分の人生に不足や不満から、出てきたものである。与次郎はそれは「現代の女性」の通病と云った。私は、それは美禰子が高い理想を持っているからだと考える。野々宮と空中飛行器についての討論では言ったように死んでも空を飛びたい、と当時の女性としては過激な考え方からも、彼女の「乱暴」さが見える。しかし「乱暴」と言われても、美禰子はやはりその時代の枠を完全に超えられていない。最後に、「だれの予想をも裏切って、三四郎でも野々宮でもない第三の男と、ありふれた見合いで婚約してしまう。」²これは美禰子が自立を断念した一つのあらわれともみられる。

¹ 同上

² 相原和邦「漱石文学にみる「しぐさ」」（中国新聞、1988年）

「ありや妙な女で、年の行かない癖に姉さんじみたことをするのが好きな性質なんだから、引き受けさへすれば、安心だ」(『三四郎』八の二)

「短い言葉であるがこのなかには、勝気、積極的、伶俐、実行力、あるいは多少の注釈つきで誠実、というような要素を読み取ることが出来るであろう。」¹⁾比較的単純な静に対し、美禰子がこのような多面性の性格を持つことも二人の違いと思う。

肌の色

『心』のお嬢さんは「地体が色の白い」。それと引きかえて美禰子は小麦色の肌を持っている。実は漱石文学には「お嬢さん」や三千代をはじめ「顔立ちも古風で色が白く、振る舞いも控えめである。いわば、伝統的なタイプの女性たち」と「美禰子」をはじめ「眼が大きく、小麦色の肌を持つこととあわせて、近代的美人」²⁾の二つのタイプに分かれている。白い肌は一般的に女性の美しさを形容するが、同時にはかなさといった脆弱なイメージがある。比べて、小麦色の肌は健康で若々しく活動的といったイメージがあり、これは肌の色と同じように伝統的美人は弱々しく、近代的美人は活発に活躍するイメージを漱石は持っていたと考えられる。

第二章. 結婚後の女性像 - 『心』と『それから』

『それから』³⁾、『三四郎』、『門』は漱石の三部作を構成しており、『それから』はその中の二作目に相当する。漱石自身も『それから』の予告で『それから』は色々な意味に於て『三四郎』のそれからであると述べていた。よって、『それから』の女性像の中に『三四郎』の痕跡をみることができ、三千代の中に美禰子を見出すことができる。このような両作品の関係性をもとに、以下に結婚後の女性像として三千代を取り扱って静と比較をし分析を行う。

1. 共通点：

教育程度

静と同じく『それから』の三千代も「国の高等女学校を卒業した」当時の女性と比べると比較的知識のある女性である。『それから』では代助が初めて会ったとき、三千代に

¹⁾ 同上

²⁾ 同上

³⁾ 『それから』：夏目漱石の中編小説。1908年《朝日新聞》に連載。《それから》《門》と三部作をなす。実業家の父の経済的な援助のもとで裕福な生活を送る代助が、恵まれた生活を捨て、三千代とともに生きる決意をするまでを描いている。

ついて、以下のように描かれている。「国の高等女学校を卒業した許りで、年は慥十八とか云ふ話であつたが、派出な半襟を掛けて、肩上げをしてみた。」（『それから』七）

『心』の先生と静が会った時は、静も高等学校を卒業することになる。

外貌

『心』では奥さんとしての静は主として上巻及び中巻で学生である「私」の目を通して描かれている。外貌描写は相変わらず少ないが、その形容は変わらず「美しさ」を基本として描かれている。

奥さんの静に対する「私」の第一印象は「美しい奥さんであった」。さらに、「私」にとっては「今しがた奥さんの美しい目のうちに溜った涙の光と、それから黒い眉毛の根に寄せられた八の字」と描かれている。

一方、『それから』では三千代について次のように描かれている。

平岡の細君は、色の白い割に髪黒い、細面に眉毛の判然映る女である。一寸見ると何所となく淋しい感じの起る所が、古版の浮世絵に似てゐる。（『それから』四）

『それから』の注釈では、浮世絵について以下のように説明している。江戸後期の喜多川歌麿がとくに優艶な美人版画で一世を風靡した。「古版」は古くなって色がくすんだ感じをいう。明治四十二年三月十四日の漱石の日記に「歌麿のかいた女はくすんだ色をして居る方が感じが好い」とある。「日記」は夏目漱石の日記である。よって、漱石は三千代を伝統的な美人として描いているといえることができる。

また、注目すべきは『心』の静の「美しい目の」の描写と同様、『それから』の三千代を通して

美しい線を奇麗に重ねた鮮かな二重瞼を持つてゐる。眼の恰好は細長い方であるが、瞳を据えて凝と物を見るときに、それが何かの具合で大変大きく見える。（『それから』四）

と描かれており、「美しい目」は共通点としてあげられる。

子供がいない

二人は結婚しているのに、理由は異なるが、両者とも子供がいない。

「子供でもあると好いんですね」と奥さんは私の方を向いて云つた。私は「左右ですな」と答へた。（『心』「上 先生と私八」）

¹ 中山和子、玉井敬之『漱石全集』第六巻注解（岩波書店、1994年）

三千代は東京を出て一年目に産をした。生まれた子供はぢき死んだが、それから心臓を痛めたと見えて、兎角具合がわるい。（『それから』四）

静は常に子供がほしがっていた。けれど、なかなか子供ができていない。しかし、三千代の場合とは異なる。三千代は出産をしたが、間もなくその幼児の死に遭遇していた。

漱石の作品にあまり子供が出てこないのは漱石の経歴と関係があるのではないかと考えられる。漱石は歓迎されてない子として生まれた。また、養子としても、後に自分の家に戻っても、あまりいい思い出がなかった。よって、『心』で「子供を持った事のない其時の私は、子供をただ蒼蠅いものの様に考えていた」と言っている青年の「私」の感想は作者漱石と重なってくるように思われる。

夫との関係

既に結婚し、明治時代の知識人の妻として二人の夫との関係は非常に微妙である。

まず静の方からみると、静の夫「先生」は静を守るという名目で過去のことを一切静に言わない。従って、静との精神的な交流も少なくなってきた。『心』では静は次のように語っている。「いゝえ私も（先生に）嫌はれてゐる一人なんです」（『心』十七）「私は嫌はれているとは思ひません。嫌はれる訳がないんですもの。然し先生は世間が嫌なんぞでせう。世間といふより近頃では人間が嫌になつてゐるんでせう。だから其人間の一人として、私も好かれる筈がないぢやありませんか」（『心』「上 先生と私十七」）。このように、静は「先生」との関係を自覚している。

『それから』の三千代と夫との間にさらに微妙な距離が存在している。三千代は心臓病で体の調子は決して良いと言える状況ではなく、夫平岡をとりまく社会的近況も良いとはいえない。代助はこの夫婦と会った後、すぐ何かを感じていた。けれども「代助は、あの時、夫婦の間に何があつたかと聞いて見様と思つたけれども、まづ已めにした。」（『それから』四）と、描写されている。

2. 相違点：

結婚生活の状況

妻（静）の家にも親子二人位は坐つてゐて何うか斯うか暮して行ける財産がある上に、私も職業を求めないで差支のない境遇にゐたのですから、さう思はれるのも尤もです。（『心』「下 先生と遺書五十二」）

これは結婚後、静夫婦の生活は経済的に比較的余裕があることを示している。一方、三千代の結婚生活は様々な事情がある。まず、三千代自身は心臓病に苦しんでおり、さらに、夫の借金で、三千代は代助から借金をせざるをえなかった事情があつて、生活は苦し

い。

性格

相原は『漱石文学』では「(『心』の)お嬢さんは、当時の時代以上に理想化されている。例えば、彼女は、その「理解力」で「私」を感心させ、「旧式の日本の女らしくない」態度でありながら「其頃流行り始めた所謂新しい言葉は殆んど使わなかつた」(上・十八)とされている。別に、「奥さんはそれよりもつと底の方に沈んだ心を大事にしてゐるらしく見えた」(上・十六)という叙述もあるように、旧時代の枠はすでに越えているけれども同時現代風の新しがり屋の女ではなく、内に芯を潜めている点、『それから』の三千代に通う漱石好みの女性なのである。」と述べられている。

現に『それから』を見てみると、「漱石の作品中最も魅力のあるヒロイン」と言われている三千代は性格の面では静より「心強い」所もある。静の人生を留意してみると、不幸は不幸であるけれども、周りの人は出来るだけ静のことは見守っている。少なくとも静には生活の心配がない。しかし、三千代は違う。子供に死なれた上「自分の長い病気、夫の放蕩、借財、というような辛酸を舐めたので、その心魂はかなり鍛えられてしんは強くなっている。²⁾

こうして、強くなったからこそ、代助からの愛の告白を受けとめる勇気が湧いてきたとも考えられる。さらに「漂泊でも好いわ、死ぬと仰しゃれば死ぬわ」(十六)と言い切ることまでできたのである。

第三章 漱石文学の女性像

第一章と第二章では『心』を中心に、共通点と相違点の検討を通して未婚の女性像と既婚女性像を明らかにした。未婚の女性像と既婚女性像の共通点は一目瞭然である。本章では、表を利用してこの共通点を踏まえて漱石文学に存在する普遍的な女性像(未婚、既婚を問わない)を示す。

外 貌	美人である。特に美しい目をしている。
教育程度	相当程度の知識を持っている。
性 格	時代の枠を越える面と、その時代に応じる日本女性らしさを持っている。

三作品のヒロインはすべて以上の特徴を持っている。ここで、三人の相違点に焦点を絞り、分析した結果は以下のことが明らかになった。まず、未婚女性と既婚女性の相違点があげられる。漱石文学に登場する未婚女性と既婚女性の一番の違いは性格にあると考えら

¹⁾宮井一郎『漱石文学の全貌』上巻(国書刊行会、1984年)

²⁾同上

れる。未婚の女性はまだ自立性を持っており、自立性を求めている。しかし、結婚後は、生活の繰り返しに、その自立をあきらめてしまう。美禰子はその典型であろう。美禰子の結婚は「仰向く」女から「俯向く」女への変身だと相原は指摘しており、さらに「それは、美禰子における自立の姿勢の断念であると同時に、日本の近代における女性の生きかたの困難さの象徴でもある。」¹と言いきった。が、美禰子と反対に、かえって三千代は代助の愛の告白で「俯向く」女から「仰向く」女に変わってきた。それは、彼女が婚姻という城から出ると決意したからである。確かに明治という時代を考慮すると、自立した女性の生き方そのものが困難であることは事実であるが、生きるために、既婚女性は変わってしまう。一方、漱石は婚姻生活があまりうまく行かなかった、といわれている。よって、漱石自身は婚姻を恐れているかもしれない。それは、漱石自身も結婚生活から脱出する念願も含まれているのではないのだろうか。

第四章. 現実における女性像

漱石に関する文献、特にこの三作品に関する文献を参考に、この三作品と関連ある漱石の生活に実在していた女性を明らかにすることができる。また、これらの女性の共通点を明らかにする。

漱石の妻、鏡子夫人の『漱石の思ひ出』によると、漱石は女性の存在には「なかなか気のつく方」とある。このことから、漱石文学に登場する女性像はほとんど実在している女性によって書かれたと容易に想像できる。

「漱石の創作方法は、すべて^{フィクション}虚構というわけではなく、事実から多くのパン種を得るのが基本的な特徴である」。

このように、漱石の作品を読むと、漱石の現実における女性の面影が見え隠れする。

漱石の一生を見てみると妻・鏡子夫人の存在の他に、以下の女性の存在も漱石文学を分析する上で重要な位置をしめている。まず注目すべきは、漱石の幼馴染の日根野れんである。彼女は漱石の養父塩原昌之助の後妻かつの連れ子である。「養父昌之助は将来は金之助（漱石）とれんを夫婦にして老後の安堵を得る心づもりだったらしい³。とあるように、漱石自身もれんに好感を持っていた。また「明治二十四年の七月中に、漱石が駿河台の眼医者に通って、突然再会した「銀杏返しにたけなわをかけた女」を小宮豊隆『夏目漱

¹ 同上

² 小坂晋『夏目漱石 - 伝記と分析の間を求めて - 』（桜楓社、1986年）

³ 石川悌二「養家と恋人」（『講座夏目漱石第一巻漱石の人と周辺』（有斐閣、1981年）所収）

石』が漱石の初恋の女と推量していることであり、私は確信をもってその人の名を日根野れんとする。¹」と石川が指摘するように、この日根野れんは漱石の初恋の相手である。

しかし、漱石の初恋の相手については様々な学説がある。中国の漱石研究家、作家崔萬秋の説では「漱石の初恋の対象は、外務省某局長の娘で、漱石が眼病のため井上病院にかかっていた時、彼女は毎日、片眼不自由な老婦人の手をひいて通院、看病していた。漱石はその情深いやさしさを愛した。彼女が美人であったことは言うまでもない。だが、この初恋は実を結ばなかった。²」という説がある。

さらに、「しかし漱石には、生涯に只一人意中の女性があった。その相手は、漱石の同級で大学の美学の教授となった文学博士大塚保治の妻楠緒子であった。³」という説もある。

以上の説の妥当性は本論文では検討しない。が、説に出てくる女性は確かに存在したことは事実である。説の女性を分析すると、漱石作品に出てくるヒロインとの一致性がわかる。

まず、漱石の幼馴染みのれんから考察を行う。漱石は『道草』ではれんをモデルとして描いた御縫さんをこのように印象づけている。

御縫さんは又すらりとした恰好の好い女で、顔は面長の色白といふ出来であつた。ことに美しいのは睫毛の多い切長の其眼のやうに思はれた。（『道草』二十二）

「色白」、ことに美しいのは其眼などのれんの外貌の特徴と漱石文学に登場するヒロインの外貌描写にぴたりと一致する。また、れんは当時の女の最高学府だった東京高等女学校（お茶の水女子大の前身）に進学し、卒業した。相当の知識を持っていた。

次に、外務省某局長の娘である。この娘についての資料はわずか残っている。この説の研究者中国の漱石研究家、作家崔萬秋も鏡子夫人も井上眼科の女性について美しいだけでなく、気立てが優しく、心から親切な女性であったと述べている。

最後に、大塚保治の妻楠緒子について言及を加える。彼女に関する文献が数々残されている。この漱石が「理想の美人」と称した人については「漱石の好みがはっきりするいかにも育ちの良さそうな気品ある純日本風の容姿である」、「色白で瓜実顔の夢幻的な外貌だけでなく、漱石が「いつも女性らしい女性と感心していた」（松根東洋城）⁴また、彼女は女流作家としても知られている。

以上の漱石世界に実在している女性の検討を通して以下のことが明らかになった。

¹ 同上

² 崔萬秋「『三四郎』訳」（北京、中華書局、1935年）

³ 『近代作家傳下巻』（創元社、1951年）

⁴ 小坂晋『夏目漱石 - 伝記と分析の間を求めて -』（桜楓社、1986年）

みな裕福な家庭で生まれ育ち、相当の教育水準を有している。

単に顔が美しい人だけではなく、心が優しく、控え目のある日本伝統的な美德を持っている人である。

漱石文学に登場させるヒロインと現実の女性の特徴の重なる部分が数多く見られる。この重なる部分は漱石自身が好ましいと考えている部分である。

第五章. 結語

初期の『草枕』の那美さん、『虞美人草』の藤尾，中期『三四郎』の美禰子、『心』の静、『それから』の三千代、『門』のお米、『彼岸過迄』の千代子，後期『行人』のお直、『道草』のお住、『明暗』のお延など、漱石は様々な女性を彼の文学に登場させている。漱石文学において男性主人公は、弱気、恋愛・夫婦関係における信頼性のゆらぎ、および神経症といった性格付けがなされている。対照的に女性達の外見は一見脆弱に映るが、その実、強靱な内面性を持ち合わせ、思いきりが良く、勇気を持っている。この点から、漱石はかなり肯定的な女性観を抱いていたと思われる。

東西の文化が衝突した明治時代の日本に生きた漱石は、彼の小説において明治時代の知識階層の状態を克明に記している。漱石はその階層の一人としても、常に自分と社会と家庭との位置づけを模索していた。漱石は東西文学のぶつかった時代に自分の進むべき道を選ぶ男性を描くことを通して、同時に女性の問題も取り上げた。この時代に女性はどうか、家庭に対して、あるいは両性関係、いわゆる男女関係に対して、どのような態度を取るべきか、漱石もまた彼の小説で様々な検討していた。したがう、漱石文学に登場させた女性の大半は、日本と西洋の特徴を持ち合わせた人物を描いている。漱石文学では伝統的な日本風美人が多いが、彼女達の心は強く、独立性があるところは西洋的と言える。また、美禰子のような比較的西洋的・現代的な女性もやはり日本伝統的な美德を守っている。このところは一見対照的的な今の女性にも通じるところがあり意義深い。

参考文献

- | | | | |
|-------|------------|------|-------|
| 夏目金之助 | 『漱石全集』第五巻 | 岩波書店 | 1994年 |
| 夏目金之助 | 『漱石全集』第六巻 | 岩波書店 | 1994年 |
| 夏目金之助 | 『漱石全集』第九巻 | 岩波書店 | 1994年 |
| 夏目金之助 | 『漱石全集』第十二巻 | 岩波書店 | 1994年 |